

英語教育の飛躍に向けて

平田和人 (文部省)

リチャード・スミス (東京外国語大学)

金谷 憲 (東京学芸大学)

新しい視点を求めて

金谷 本号の特集は英語教育の新時代ということと様々な角度から日本の英語教育、これからのあり方についてとりあげていることかと思えます。この座談会では、他の記事とトピックが重複することは避けられないと思いますが、新しい視点のようなものを考えられないかと思えます。

授業を見るのは大変面白いし、いうまでもなく勉強になります。私の学校では小学校にも実習生をつれていきますが、面白いですね。英語というわけではなく、国語や算数、体育とかですね。例えば算数でどうやって分数を教えるのか、とても見当がつかませんが、生徒の取り組みや先生の指導に感心させられますし、楽しい授業ですね。ただ、授業の講評を頼まれるのが困るんですが(笑)。

平田 そうですね、研究開発で小学校におじゃますることも多く、私の場合はいろいろな教科というわけにはいきませんが、たしかに新鮮ですね。言葉の運用能力というより、言葉とのふれあいを実感し、いかにも学校らしいなと思います。中学生や高校生は、授業で教えられたことが後でどう評価されるか知っているわけです。小学生の場合は成績・評価ということを気にしないで、戸惑いもあるかと思いますが、純粹に取り組んでいます。新しいことを求める活力が感じられます。

金谷 新しいことをやる時は大変だけれども面白い、それがマンネリになってくるとつまらなくなる。ですから現場の先生方は大変ですけど、いつも新しいことを求める必要があります。そういうことで新しい英語教育、飛躍に向けて何が最

も重要か、その点から私も含めて話を進めたいと考えています。先ず平田先生から、必ずしも文省的な見解ということではなくお話しいただきたいと思います。

英語教育をどうとらえるか

平田 むしろ文部省的な見解をといわれると：し構えてしまいます。具体的な施策については在審議の過程にあるわけですので、なおさら発はむずかしくなります。もっと先の展望を個人的な見解として話してくれということですので、それを話そうと思います。ざりとて「文部省的な」と対立するわけではありませんが、

まず明らかにしておくべき課題としましては、外国語の教科としての側面が強すぎるのではないかと思うんですね。つまり、先生方の意識あるいは無意識的に、学問としての位置づけ、外国語を通して学問をしているという考えの足かせのなで指導している。もちろん平和教育とか異文化理解など重要な課題ですし、また深遠な真理を追求することも必要でしょう。しかし、そこから一歩踏み出して言葉を生きた形でとらえる、コミュニケーションの手段としての外国語の意味をつかむきではないか。言葉をどう使うのかというのは遠くではない、shallow, superficialだという考がどこかにあるのではないのでしょうか。

スミス たしかに英会話という言葉にはそういう浅いニュアンスがあります。でも最近の研究、例えば話し言葉の文法や談話についての研究がありますが、もっと知られたらいいと思います。つまり speaking だから浅いとときめつけないで、

金谷 そうですね、挨拶を覚えるのが shallow だというので、話しの中味、公害問題や国際平和を話せといったように、扱う題材を難しくすれば深くなると考える人が多い。むしろ日常的な普通の言葉のやり取りの豊かさといったものに目を向けた方がよいと思いますね。

ただ教育というコンテキストの中では、何かを通じて別に高尚な目的を達成すべきだ、日本人の性向かもしれませんが、そういうふうな大きさに考える傾向がある。スポーツ、例えば柔道をやって精神を鍛えると言う。精神を鍛えるのもけっこうですが、別にそれを目的にしないで柔道を楽しんではいけなんでしょうか。そう言う、いやいやそうはいかない、学校教育で扱うのは、柔道は方法で、目的はあくまでも精神を鍛えることで、となる。

平田 そうですね。ですから言語を教科として意義づけるときにそれにつながる。要するに「何々道」というものです。

それからコミュニケーションのための英語を教えるには、音声重視、activeな活動が大事だといわれています。これも過去のバランスで強調しているわけで、読みは不要か、英語にもなっていない文章を書かせるのかという批判は当たらない。音声、表現、そこが欠如していたから強調しているという経緯を理解していただきたいと考えています。

次に考えたいのは評価の問題です。指導法には先生方の目が向く、新しい指導はどうあるべきか、いろいろ工夫します。きちんとした指導の結果として、自然に指導内容は生徒が理解し、力がつく。あくまでも結果を評価すればいいんだと考えがちです。指導法と連携した評価のあり方にはあまり意識が向いていない。生徒の方は、先生がいくら熱心に指導に努めても、それが成績に反映されないものなら必ずしも努力を集中しない傾向が現実的にあるわけですから。

「飛躍」にむけての出発点

スミス 日本の英語教育の「飛躍」を考えるのであれば、まず、他の国に比べて良い点、つまり

英語展望 1997年増刊号

飛躍を促す可能性のあるよい動きを出発点にして考えるのがいいのではないかと、思います。その中でも特に重要だと思うものをいくつかあげてみます。



平田和人氏

まず、日本では英語の教師はほぼ

すべて短大、または大学卒業者であり、英米文化、特に高文化 (Culture) の知識が豊富です。また、最近では、教師の英語の運用能力も高く、異文化接触経験も豊富になってきているでしょう。さらに、先生方の研究会が多く、研究活動も盛んです。次に、新学習指導要領は異文化理解だけでなく、4技能におけるコミュニケーション能力という実用的な英語に重点を置いています。教科書の内容も概して教育的価値は高いと思います。ただ先ほどの平田先生の話と関連した将来的な期待ですが、オーラル・コミュニケーション (OC) は浅い、というのではなく、深い面があることを教科書に盛り込んでほしいと思います。それから、入試もよく言われているよりは改善の動きがあると思います。インターネットなどの普及による英語のリソースの増大も見逃せません。こういった基盤、良い点を発展させると英語教育はさらに飛躍するのではないかと思います。

金谷 日本の英語教育はどうかと言う時、これはどこでも同じでイギリスの外国語教育という場合もそうでしょうが、現実には極端に言えば先生の数と同じだけある。研究授業といったものだけでなくいろいろ授業を見る機会がありますが、先ほどの shallow な会話に終始する授業から、OC-B といっても B は文法の B だという授業、それを見た親が批判したり安心したりしています。良い悪いということではなく、受験一辺倒から受験完全無視の授業まである。同じ英語といっても別世界のような授業があるのが現実ではないでしょうか。

それから表現重視の指導といっても、一方に挨拶のパターンとショッピングだけ、他方堅いテー

マを扱う演説・スピーチ，という分裂があるので
はないか。人間のコミュニケーションとは何なの
だろうか。挨拶と演説の間にいろいろ豊かなもの
があることの認識がわりあい少ない。母語でのコ
ミュニケーションを考えればわかることです。

今、スミスさんから日本の英語教育の良い点を
あげられ、そこから考えていこうという姿勢、そ
れが大事だと思います。たしかに教科書を考えて
も、いろいろ批判がありますけど、今の指導要領
で言語材料の学年配当がはずされましたし、先生
方が主体的に使うのに不適當なものはないように
思います。制度面で残っているものとしては、ク
ラスサイズと授業頻度・時間数でしょうか。

クラスサイズの問題

平田 クラスサイズは純粹に行政の問題だと思
いますが、先日出された中央教育審議会の答申、
外国語に限ってではありませんが、クラスサイズ
を欧米並みにしていく、つまり小さくするのがい
いのではないかとっています。方向性は出されて
いると思いますが、現実はどう進めるか。外国
語だけを特別に扱うには意義づけをしっかりとす
べきですし、全体的にするとすると予算など大規模
な改革になりますね。

スミス 最近、群馬県の中学校のティーム・テ
ィーチングを見に行っただんですが、各クラス18人
くらいで、非常にいい雰囲気、生徒と先生の親
しきなどやっぱり違うなと感じました。

金谷 東京の真ん中でも生徒が少なくなる現象
がありますね。小学校なんかだと一番多いクラス
で16人、少ない学年は2人とかいった学校があり
ます。一つの学校で遠足ができないので近くの学
校と一緒にとか、これは制度的なものではなく自然
減ですが、ともかく40人、50人だとやりにくい
のはたしかですね。私も付属の中学校で教えさせ
てもらったときですが、インフルエンザが流行って
5、6人休むとすごく楽だった記憶がありますね、
休んだ生徒には悪いんですが。

平田 大きな方向としてはクラスサイズを小さ
くする、そのために努力することが必要です。た
だ、同時に指導法、どう指導するかを押さえてお

かないと少なくなったクラスを有効に活かせない。
他教科はともかく、外国語の授業は小人数である
べきだというならなおさら重要です。

私も先生方との話で、クラスサイズが小さかつ
たら、あるいは入試に英語がなかったらどう指導
したらいいんでしょうと話すことがあります。つ
まり、その理想に向かって現実的にできることを
考え、グループ活動とかいろいろ工夫を積み重ね
ることも、当然のことですが大事だと思うんです。
もちろん人数が多くてこんなに苦労しているとい
うこともどんどん言うべきですが。

金谷 乱暴な言い方かもしれませんが、予算が
あればできますよ、予算がないからできませんよ
と単に主張しているように取られると、予算をあ
げてもやらないんじゃないかと疑いの目で見られ
る。現状でこんなことが不可能、あるいは大変な
苦労をしてやっている。ところが人数が少なけれ
ば十分可能だ、さらにこういうこともできるとい
う具体的なイメージを示せると説得力が出る。必
ずしも容易なことでないことは承知していますが、
そこで問題になるのが教師の質ということになる
かと思います。

教師と学生と大学の連携

スミス 英語の教育を良くするいろいろな方法
があると思いますが、私は中心は教師の問題、
teacher developmentが重要だと思います。教職
課程の充実、教職に就いてからの教員養成の機会、
大学のフォローアップ体制、ティームティーチン
グの相互ディベロップメントとしての活用などが
あげられるでしょう。

金谷 私も教員養成大学に勤めていますし、教
員養成と現職教員の研修が大事だと思います。た
だ、先生が悪いんだと教員をいじめるような議論
は建設的でない。先生方も不安だと思うんです。
例えば、教職課程にしても十分でない点も多い。
先生になってからも、持ち時間が多くて他の先生
の授業を見る機会は少ない。大学をいったん卒業
すると縁が切れる。それで、どう先生方をサポー
トするか議論をしたい。

スミス 最初に教職課程がありますが、もっと

現場の経験のある先生も入れたほうがよいと思います。それから英語だけではないんですが、教育実習は2週間では足りないと思います。

さらに重要なのは教師になってからの研修ですが、positiveな一例として私の大学でやっていることを紹介したいと思います。教職課程担当の先生、学部の学生、それに最近教員になった卒業生たちの話し合いの場があります。学生は現場の先生から教えられる。大学の先生も最近の現場の状況がわかる。もちろん現場の先生も勉強になる。それぞれ3つの立場からtriangleな関係で、お互いに得られるものは多い。こういう、bottom upな方法が増えるとよいと思います。

金谷 研究会も盛んですが、大学の先生をもっと活用と言いますか、一緒に考える場に呼ぶといいですね。先ほどの話にありましたが、高尚な学問も大事ですが、英語教育は現実的な問題も多いのですから、大学の先生の方でも得るものは多いはずです。

平田 各県に教育学部を持った大学がありまして、その先生方は研究会の顧問という形で参加していることが多いと思います。でもなかなか忙しいので、気楽に話すレベルでの交流は難しそうですが、如何なものでしょうか。

金谷 いや、もっと積極的に誘ったほうがよいと思います。あんまり遠慮しないで。例えば、文部省の指定で2年間研究することになった学校のお手伝いをするのですが、学校から声がかかったのが最終段階のことがありました。すべて整い、来月発表会があるという段階です。予行演習のような場に呼ばれ、こんなふうに発表しようと思いますかどうでしょう、と言うんです。ところがちょっと問題がある。でも今さら組み直しは利かない。なんでもっと早く、2年前に呼んでくれなかったんだと思う。学校の方では、白紙の状態はどうでしょうか？と聞くのは悪い、失礼だということです。あるいは、最初に話し合いを持つと、口のうまい大学の先生のペースになってしまうと考えたのかもしれません。そのような遠慮や気がねなしに、もっとお互いにフランクな交流ができるといいんですが。

ALTの役割

平田 研究指定校の場合などは、文部省も間に入ってくる調整することが、その研究を充実したものにすだけでなく、研究体制のあり方の面でも役に立てることでしょうね。

それからコミュニケーションのための英語ということで先生方をサポートするのに、ALT、外国語指導助手の役割も大きい。先生の自信ということとnative speakerの存在とは大きなかわりがあると思います。英語が研究対象ではなく、実際に使うことが要求されているわけです。特に、自分の英語に不安を持っている先生にとって、native speakerは心強い存在である反面、自分の英語のevaluationになるという懸念もないとはいえません。JETプログラムが始まった当初、これは大変だと早めに退職したという年配の先生が事実いたそうです。これは極端かもしれませんが、どこか間違っています。

スミス それはわかる気がします。はじめにALTとして日本に来たとき、2年間の契約でしたが、その期間中私に話してくれない先生もいました。最初は、単に私のことを避けているのだと思っていましたが、後になって、それらの先生にとって他の人の前で英語で話すのが大きなプレッシャーだったのではないかと、ということが理解できたのです。ですから、ALTはそういう面でsensitiveにならないといけない。今はわかりませんが、私たちの頃は日本の英語教育を改善するという、使命感のようなものがありました。大学を出たばかりですから、傲慢な態度がありました。ALTに相手の意見を聞く能力、英語とか日本語の問題ではなく、じっくり耳を傾けることができると、役割は大きい、有効だと思います。私もALTだった頃、毎週水曜日ファミリー・レストランに集まり、数人のALTと中学の英語の先生



リチャード・スミス氏

方が教育の問題を話したことがあります。そういう場で、ALTは非常に役に立つ仕事だと感じました。

平田 そうですね、授業だけでなくそういう場があると理解が深められる。それから、ティーム・ティーチングもそうですが、将来的に本場の意味でイコール・パートナーとなるには英語力の問題でも共通理解が必要です。つまり、日本人の先生は第2番目のコミュニケーションの手段を手に入れている、妙な劣等感を持つべきではない。そういう共通認識ができれば英語教育はもう一段階発展する。言葉をいわゆる道具として使うという認識ができ、教えることができるようになると思います。

ALTとの共通理解

金谷 日本人の英語に対する劣等感、英語の先生の inferiority complex というのはたしかにあり、スミスさんも経験されたと思いますが、どうしたら緩和する、うまくいくか妙案があったら教えてくれませんか。

スミス ALTとの関係において、ということであれば、まずALTがそのことに気づくことだと思います。私は長い間そういう complex があることを理解していなかった。ALTの頃、私は一所懸命に生徒に向いていました。生徒により授業をしようと思っていました。今だったら、生徒よりも一緒に教えている先生を support、支援する。その先生の development を支援する、attempt to speak in English を支援するという全然逆の態度をとりたいと思います。JETプログラムの最も大きな目標はそのこと、先生への支援だと思います。私もそうでしたが、そのことを

えてきていると思います。

金谷 そこはALTの人たちにとっても異文化に対する態度を養う良い機会にはなりませんね。

平田 日本人の先生にとっても、何を重視していくか、英語の間違いをどうとらえるかという英語教育の基本的な課題でもありますが、意識を変えることが必要ですね。

金谷 それではALTはもっと増えるのでしょうか、増やすべきでしょうか、それはいかがでしょうか。

平田 増えるかどうかという要素は3つあります。システムとしては、ご承知のように先ず各都道府県から人数の要望が出ます。それに対して自治省が人数を配分する。当初の目標は3,000人でしたが、あっという間に越え、6,000人に達するのは時間の問題と思われています。ですから今後その要望がどうなるか、予算がどうなるかということ。第3の要素は小学校からの要望です。この3つの要素から言えば、まだ増える可能性は十分にありませぬ。

金谷 私の意見ですけど、ティーム・ティーチングも重要ですが、先ほどのクラスサイズの問題として考えるほうが良いのではないか。生徒のケアが良くなり、英語にふれる機会が増える。実質的にクラスサイズを縮小する、そう意味でももう少し増えてもいいのではないか。

英語教育と多様な外国語

スミス 今日のテーマは「英語の教育」ですが、英語だけでなくほかの外国語ももっと教えることについてはどうなるのでしょうか。

平田 私個人の意見としては、いろいろな外国語を教えることが望ましいと思っております。あま

際的通用性ができている。2つ目の外国語があつていいと思いますが、英語を飛ばすのは現実的ではないと思います。

平田 私も英語を無視するのは現実的でないと思います。ただ、ある外国語を中心に徹底してやり、英語は必要だから一応やっておくというのがあっていい。

金谷 選択の余地が増えるのはけっこうだと思えます。ただ逆説的になるかもしれません。英語教育の効果をあげることがいろいろな外国語に向かう近道ではないでしょうか。

英語のリソースの活用

スミス これまで日本のような国ではEFL (English as a Foreign Language), つまり英語が外国語でした。しかし外国人が増え、情報革命、コミュニケーション革命、特にインターネットの発達と普及で英語は第2言語, ESL (English as a Second Language) としての性格が強まると思えます。映像を通してビデオ会議も可能になります。思います。当面は英語を書くことが重要になります。オーラル・コミュニケーションの先に総合的なコミュニケーションが必要になると思います。和文英訳でないライティングが必要になります。

平田 そうですね、インターネットの時代は文章を使った発信型、本当の意味の文字を使ったコミュニケーションの場が飛躍的に広がり、英語教育の重要性が強まるのはたしかです。

金谷 高校のライティングなどをティーム・ラーニングでやるのはすごくよいと思います。ただALTに、正しいか間違いかの判断を求めるよりも、間違えたものがあつたら、それはどういうふうに誤解を生じるのか、別のどんなイメージに

入試をめぐって

平田 これからの英語教育の飛躍には、評価がキ一・ポイントになると思います。特に入試はあまりにも影を落とすぎていますね。入試の実態はかなり動

いている面がありますが、イメージとしての入試は不動のように思われています。そのイメージに乗って、大学入試が変わらないから現場はどうしようもないという意識が強い。たしかに大学の出題意図が不明な問題も多く、入試は変わってほしいとは思いますが。

金谷 先生方に、それほど入試対策が忙しいのですかと聞いてみる。例えば、入試解説書の第一に出てくるのは「長文化」なんです。それに対してどういう対策をしていますかと過去300人ほどの先生に聞いたと思います。何らかのことをしているとおっしゃったのは4、5人でした。これはどういうことなんだろうと思う、非難しているわけではなく不思議な気がします。一つの広報問題、コミュニケーション問題だと思います。これまで悪い問題をあげつらうことの積み重ねの影響ではないか。先生方は自分の目で見たい問題を確かめべきだと思えますし、社会のなかのコミュニケーションのあり方を考え直す必要があると思います。まだまだ課題はありますが、本日はこれでおしまいにさせていただきます。



金谷 憲氏